

- (6) Winifred Hughes, *The Maniac in the Cellar* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1980) Preface.
- (7) Dickensは1860年代には作家活動より公開朗読に熱心になった。
Fred Kaplan, *Dickens: A Biography* (London: Hodder & Stoughton, 1989) 418-57.
- (8) Kathleen Tillotsonは*The Woman in White*, *Great Expectations*, Mrs Henry Woodの*East Lynn* (1860-1) そしてMary E. Braddonの*Lady Audley's Secret* (1861-2) をセンセーション小説の代表作に挙げているが、センセーション小説を‘low culture’として軽蔑したMrs OliphantやDean Henry Mansel等当時の批評家が本作品にセンセーション小説のレッテルを張ることはなかった。
Margaret Oliphant, “Sensation Novels” *Blackwood's* 91 (1862) : 464-84.
Dean Henry Mansel, “Sensation Novels” *Quarterly Review* 133 (1863) : 481-514.
W. F. Rae, “Sensation Novelists: Miss Braddon” *North British Review* 43 (1865) : 180-204.
- (9) Sally Mitchell, “Sentiment and Suffering: Women’s Recreational Reading in the 1860s” *Victorian Studies* 21 (1977) : 29-46.
高橋哲雄 3章。
- (10) Jeanne Fahnestock, “The Heroines of Irregular Features: Physiognomy and Conventions of Heroine Description” *Victorian Studies* 24 (1981) : 335.
富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世紀末』(青土社, 1993)。
- (11) *Lady Audley's Secret*でもイギリスで破産したGeorge Talboysがオーストラリアへ一攫千金を狙い出奔し、徒労に終わるかもしれない金の発掘をする。彼の心の支えもやはり故国に残した妻子特に息子に財産を残すことだった。同時代を描いたセンセーション小説ではこのように登場人物の行動範囲が地球規模に拡大している。
- (12) Anny Sadrin, *Parentage and Inheritance in the Novels of Charles Dickens*(Chambridge: Cambridge Univ. Press, 1994) 110.
- (13) フィクションの世界では罪の濡れ衣を着せられた労働者は、Magwitchのように何らかの形で救われたが、現実は逆であった。新聞雑誌も中産階級側にまわり、事実を都合がいいように歪曲して伝えた。
Mary S. Hartman, “Murder for Respectability: the Case of Madeleine Smith” *Victorian Studies* 16 (1973) : 381-400.
R. D. オールティック『ヴィクトリア朝の緋色の研究』村田靖子訳 (図書刊行会, 1988)。
- (14) 井野瀬久美恵『子供たちの大英帝国』(中公新書, 1992)。
- (15) P. J. ケイン/A. G. ホプキンス共著『ジェントルマン資本主義と大英帝国』竹内幸雄/秋田茂共訳 (岩波書店, 1994) 55.
- (16) *Ibid.* 63-65。
- (17) 小池滋『もう一つのイギリス史』(中公新書, 1991) 9章。
- (18) Peter Brooks, *Reading for the Plot*(Boston: Harvard Univ. Press, 1984) 136.

に仕える「騎士」志向になっている。市民の権利を象徴する‘the law’はこれと競合する‘Her Majesty’にすりかわったのである。彼もHerbert同様大英帝国の青年の一面を表しているのだが、HerbertとPipとの決定的違いは、前者が“a natural incapacity to do anything secret and mean” (201) であるのに対し、後者はEstellaの実の父母がMagwitchとMollyであることを知り、しかもそれを秘密にするという、所詮秘密の世界の人間であるということだ。但し、秘密を握られていた立場が握る立場に逆転し、Pipは秘密を暴露する市民ではなく、秘密を守る忠実な「騎士」になってはいる。

Peter Brooksは19世紀小説のプロットの起動力は「欲望」であるという立場から、*Great Expectations*のそれを分析し、PipとEstellaが再会する結末は不要だと言っている。“The real ending may take place with Pip’s recognition and acceptance of Magwitch after his recapture — this is certainly the ethical dénouement — and his acceptance of a continuing existence without plot, as celibate clerk for Clarrikers. The pages that follow may simply be *obiter dicta*.”⁶⁸ Brooksの意見によると、「欲望」のエネルギーが最大級のMagwitchのプロットからPipが逃れた時点で、この作品は終わるべきなのだ。しかし、この作品ではプロットの起動力は‘desire’というよりPipの満たされることがない‘hunger for information’ (137) ではないだろうか。Brooksが指摘するように、確かにPip, Estella, Molly, Miss Havisham, Magwitchの人間関係はフロイトの‘Family Romance’が幾重にも振じれて展開したものだ。しかし、ここでプロットが錯綜するのは、主人公Pipの人生とMagwitch, Miss Havisham等他の全ての登場人物の人生が並列して同時進行し、Pipのプロットが他者のプロットと接触し、予期不可能な方向へプロットのベクトルが走るためである。その際、仕掛人は往々にしてPip以外の人物であるがゆえ、Pipは自己の欲望に忠実に従えない程、絡まったプロットを紐とく情報を探し求めている。Brooksが残念がるPipとEstellaの再会の場面は、MagwitchとMiss Havisham亡き後の“a continuing existence without plot”ではなく、「市民」Pipのプロットの終わりであると同時に「騎士」Pipのプロットの始まりとみなす方が自然である。

Text: Charles Dickens, *Great Expectations* (Penguin Books, 1985) .

引用末尾の数字はペンギン版テキストのページ数を示す。

<注>

- (1) Kathleen Tillotson, “The Lighter Reading of the Eighteen-Sixties” introduction to Wilkie Collins, *The Woman in White* (Boston: Mass, 1965) 15.
‘The Sensation Novel’の当時の受容と批評史については拙稿「錯綜するプロットの謎：フェミニズム批評から読む*Lady Audley’s Secret*」(「法政大学教養部紀要」No.92, 1995, 83-101)を参照していただきたい。
- (2) Charles Dickens, “A letter to Collins” 7 Jan. 1860, Norman Page ed. *Wilkie Collins: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan, 1974) 80.
- (3) Thomas Boyle, *Black Swine in the Sewers of Hampstead* (London: Viking Press, 1989) Chap. 1.
- (4) Julian Symons, Introduction to Collins, *The Woman in White* (Penguin Books, 1974) 12.
- (5) 高橋哲雄『ミステリーの社会学』(中公新書, 1989)

4. 'The Law of England' から 'Her Majesty' への移行

ではこのような社会で「城」に譬えられる家庭はどうなったのか。家庭の平和がいかに得難いかは想像に難くない。*Great Expectations*では家庭の平和を守る解決方法が二つ提示されている。一つはHerbertの生き方で、階級の違いにこだわらず、スポーツマンシップを忘れず、海外に夢を馳せ、そこに住む。Herbertは、家柄の良さを鼻にかけるばかりで家事能力ゼロの母親と、知性も教養もあるが金儲けの才覚がゼロの父親との結婚生活にうんざりしており、鍛冶屋あがりのPipとも労働者階級出身のClaraとも対等に付き合い、世界的規模の貿易に携わるといふ夢まで抱いている。Herbertはいわゆる「ジェントルマン投資家」を目指しているのだが、しかし元手がないため、将来の展望はPipの目にもおぼつかない。

I shall not rest satisfied with merely employing my capital in insuring ships. I shall buy up some good Life Assurance shares, and cut into Direction. I shall also do a little in the mining way. None of these things will interfere with my chartering a few thousand tons on my own account. I think I shall trade ... to the East Indies, for silks, spices, dyes, drugs, and precious woods. It's an interesting trade. ... I am looking about me. (207)

‘fact’, ‘evidence’ に基づかない夢に生きるHerbertは、従来のDickensの小説では人生の落伍者になったであろう。しかし、1850年以降、海外投資が増え、「1865年から1912年にかけてロンドン市場で調達された60億ポンドの資金の3分の2は外国あるいは帝国の諸事業に流れた」⁽¹³⁾という経済事情を反映してか、彼の夢はPipの必死の資金捻出により叶えられた。二人が出向いたエジプトでは「イギリスは…外交上の制約にほとんど煩わされることなく影響力を拡張することができた。」⁽¹⁴⁾但し、このサービス業が*Hard Times* (1854)の産業ほどDickensの想像力をかき立てず、輪郭のはっきりしないユートピアで終わった感が強いのは残念である。

JoeとWemmickは、HerbertやPipと違い、「家庭は城」の信念を崩さず、城壁と大砲で外敵を退け、時には多少のうそも上手につき、暴力的破壊には絶大なる力で応える。Wemmickの家庭と職場の二分化については既に一部の批評家が研究済みなので、⁽¹⁷⁾ここではJoeの攻防の特徴について考えたい。彼の“simple faith”と“clear home-wisdom” (488)をPipはくどい程言い続けているが、これらの美德は彼が頑なに言葉の読み書きを拒否し、他者とコミュニケーションをはからないという自己防衛の結果なのである。奇怪な装いのMiss Havishamの前では“some extraordinary bird” (128)のようになり、Jaggersには“the village idiot” (168)に見間違われ、紳士になったPipを“sir”としか呼べない。Pipはこれは彼自身の差別意識のせいだと繰り返し言っているが、果たしてそうだろうか。Joeは崩壊する家族の絆を信じたいがために、敢えて現実を目を閉じているのだ。これが明白に表れるのは、彼が家族をフィクション化していることである。例えば、彼の父親は酒浸りで、働かず、妻子に暴力を振るったが、彼は“my father were that good in his hart that he couldn't abear without us” (76)と解釈し、これを信じている。PipがJoeのところに戻れないのは、彼のこの退行性のためと思われる。

では、Pipは‘the law of England’の仕組からどのように開放されたのか。11年ぶりにカイロから故郷へ戻ったPipは、Estellaへのかつての生々しい情熱を性的欲望を抑圧した騎士道的忠誠心に昇華し、彼女の美しさを“indescribable majesty”ととらえ、かつての紳士志向は「女王」

し、この「妖怪」に呪われ、命を落としたのは彼の相棒であり彼女の異母弟Arthur（もっともMiss Havishamの父親はArthurの母親と合法的結婚はしていなかったので法的には弟ではない）だけで、Compeysonは彼女の復讐など恐れてもいない。彼が復讐を恐れ逃げまどったのは、Magwitchの強靱な精神力と腕力である。MagwitchがCompeysonに命がけの復讐を誓ったのは、悪事を働いた二人に対する法の裁きがあまりにも不公平で、Compeysonが裁く側の人間を巧みに味方につけ、彼を犠牲にしたことに気付いた時だった。CompeysonはMagwitchの無知を都合良く利用し、Robinson CrusoeがFridayにしたように、聖書に彼の‘black slave’になると誓わせ、儲けはCompeysonが独り占めしていた。ところが裁判ではCompeysonが“what a gentleman Compeyson looked, wi’ his curly hair and his black clothes and his white pocket-handkercher”で、他方、Magwitchが“what a common sort of a wretch I looked” (365)であったがため、悪事的首謀者はMagwitchにされた。そして、Magwitchには禁固14年、Compeysonには7年が言い渡された。当時の裁判でこのように不公平な階級的偏見に歪められた判決がしばしば下されたことは周知の事である。⁴³当時、中産階級志向は国家的規模で推奨擁護されていたのだ。

Compeysonは最終的にはMagwitchの暴力に倒れるのだが、ここで興味深いことは二人の復讐劇がはるか遠いオーストラリアまで続いていることである。このことはMagwitchでなく、中産階級志向の教育から落ちこぼれ村を追放され、Compeysonの一味に入ったOrlickが、MagwitchがCompeysonを襲ったように、「好運児」Pipに奇襲をかけた時、Orlickの捨て台詞から明らかになる。

There’s them that’s as good a match for your uncle Provis as Old Orlick has been for you. Let him ’ware them when he’s lost his nevvvy! … There’s them that can’t and won’t have Magwitch – yes, I know the name! – alive in the same land with them, and that’s had such sure information of his when he was alive in another land, as that he couldn’t and shouldn’t leave it unbroken and put them in danger. (439)

オーストラリアはもはやMicawberやEmilyなどイギリスでの落伍者が苦もなく成功できる楽天地として描かれてはいない。ここはニューゲイトと同じで、Magwitchの行動を見張り、隙があれば彼の命を奪おうと待ち構えているCompeysonのエージェントがいる。

ところで言葉のレトリックと外見に対峙するのは、後の帝国主義の台頭を暗示するのだが、正義というより復讐を求める暴力である。この効用を若干でも味わったものは、ここでは皆「体罰」を受けている。CompeysonはMagwitchに、PipとMrs JoeとPumblechookはOrlickに、EstellaはDrummlieにそれぞれ暴力を振るわれ、皆（Compeysonは除く）初めて己の非を認める。Magwitchの報復のエネルギーは階級闘争のそれとして解釈できるが、Orlickの破壊行為は無軌道である点、彼は19世紀半ばから始まった「教育の囲い込み」体制から落伍し、暴力行為に走った若者たちがひきおこした世紀末のフーリガン現象の前兆ととれる。⁴⁴ということは、Jaggersが自在に運用し、万人の幸福と利益を約束したはずの‘the law of England’は水面下で無軌道で破壊的エネルギーを培っていたのである。凶暴な性格のMollyを‘a wild beast tamed’ (224)として平然と自宅に住ませたり、温厚で良心的なHerbertやStartopより粗暴なDrummlieに興味を引かれたり、石鱈の匂いを四六時中ぶんぶんさせるJaggersの嗜好もかなり病的と言わなければならない。

のは、それだけ父権が重要視されていたということである。すくなくとも、ディケンズの作品のプロットは父子関係を主軸に展開し、母親は「沈黙する女性」として背景に退いている。プロットが法律と深くかかわる本作品では、この傾向が特に著しいのである。

このMollyの裁判は、Magwitch, Molly, Estellaの親子関係を消滅させ、新たにMiss HavishamとEstella, MagwitchとPipの親子関係を生みだした点、本作品の中核となる出来事である。この裁判でJaggersの名は一躍有名になり、Miss Havishamだけでなく無学なMagwitchでさえ彼の存在を知り、Jaggersは彼らの養子縁組の仲介者となる。Jaggersの法律事務所はフロイトの‘Family Romance’をも売っていたのだ。Miss HavishamとEstellaの母娘関係は法律的に認められたものだが、一方、MagwitchとPipは法的には父子ではない。しかし、Magwitchは教会の墓地に佇み、囚人である彼に忠誠を誓い、礼を尽くして食べ物を運んでくれたPipに失ったわが子の面影を認め、Pipを「俺の紳士」にすることを心の支えに植民地での過酷な生活に耐えたのである。彼にとってPipは実の息子以上の存在だった。

Look'ee here, Pip. I'm your second father. You're my son — more to me nor any son. I've put away money, only for you to spend. When I was a hired-out shepherd in a solitary hut, not seeing no faces but of sheep till I half forgot wot men's and women's faces wos like, I see yourn. I drops my knife many a time in that hut when I was a eating my dinner or my supper, and I says, "Here's the boy again, a looking at me whiles I eats and drinds!" I see you there a many times, as plain as ever I see you on them misty marshes. (337)

Miss HavishamとMagwitchは自己の果たせなかった夢をEstellaとPipに託し、それぞれ「男性の心を破る淑女」「羽振りのいい紳士」にすることが献身的な親の愛情だと思い込んでいた。しかし、子供たちは親の期待を裏切り、Estellaは破る心さえない、家柄だけが取り柄の「蜘蛛」男Drumleと結婚、一方PipはMagwitchを終始「僕の囚人」としてしか見ていない。密入国したMagwitchをPipが見捨てなかったのは、傍らに常に紳士の良心とも言うべきHerbertがいて、彼を心身ともにサポートしていたからである。

ここに見られる親子関係で幸運なことは、親の愛情が子供の拘束になった時、子供は比較的容易に親子関係のベクトルを変えられることである。Pipは死の床につくMagwitchに“You had a child once, whom you loved and lost. … She lived and found powful friends. She is living now. She is a lady and very beautiful. And I loved her!” (470) と言い、Magwitchが考える父子関係を事実に基づく正当なものに帰す。Anny Sadrinはこの場面をPipの感傷の発露と分析しているが、¹²⁾彼はもともとMagwitchに感傷的な気持ちなど抱いておらず、この永久の分かれの言葉が象徴するように、相手の思い込みを正し語れる程冷静である。結局、Jaggersが取り持った養子縁組はハッピーエンドにならなかったが、事実関係究明の過程で、PipはMagwitch及びMiss Havishamの遺産が貧しい正真正銘の紳士Herbertに譲渡される合法的手続きをふんでいる点、海外に夢を託す大英帝国の青年という国民的ロマンスは巧妙に実現しているのである。

3. 法のトリックは暴力に屈するのか

Jaggersと同様に言葉のレトリックと外見の効果を熟知しているのは、詐欺師の紳士Compeysonである。彼はMiss Havishamを結婚詐欺の罠に落とし、彼女をある種の「妖怪」にした。但

throat at last and choked. Now, there was no reasonable evidence to implicate any person but this woman, and, on the improbabilities of her having been able to do it, Mr Jaggers principally rested his case. … [He] never dwelt upon the strength of her hands then, though he sometimes does now. (405)

Mr Jaggersは証拠不十分のこの裁判にあたり、念入りに下準備をし、Mollyには最初から実際より華奢に、特に腕がほっそり見える服装をさせた。そして、弁護では、手の生々しい爪痕が被害者のものであると断定できない以上、嫉妬に狂った容疑者がわが子を絞殺しようとした際にできた傷かもしれないという彼独特の詭弁で陪審員全員を陥落させた。1840年代から70年代にかけてイギリスでは骨相学や人相学が流行し、外的特徴が性格の特徴をも表すと一般に信じられていたため、¹⁰⁾Jaggersは裁判で服装の最大限の効果を狙い、成功したのだ。

言葉のトリックと外見に裁判官の判断力さえ鈍る世界では、「誰しも容疑者に仕立て上げられる可能性があり」(280)、「ニューゲートの蜘蛛の巣」(110)から逃れることはできない。Pipの根拠がなく漠然としているが、確かな罪の意識の数々はこの典型的な例である。Jaggersは勝てる見込みのある、しかも弁護士料支払い見込みのある弁護士しか引き受けないが、一旦引き受けた弁護には勝ち、他人の秘密には必要以上に関与しないという極めて合理的なビジネスマンである。しかし、構造そのものが他人を犠牲にして利益ばかりか気晴らしを求めるように仕組まれた社会では、Jaggersのような人物はMollyに限らずPip, Magwitch, Miss Havishamにとっても無条件でその意向に従いたくなる頼りになる存在なのだ。ちなみにMollyは釈放されると即彼に庇護を求め、彼は彼女を家政婦に雇い、「飼い慣らされた野性の動物」(224)として扱っている。

Mollyに娘殺しの意思があったかどうかについては、事件当夜の彼女の様子を知るMagwitchの話から、実際彼女に殺意があったことが判明する。勿論、用意周到なDickensは彼の粗野な言葉でタブー視されていた性的逸脱行為とその悲惨な結末を語り、上品な読者の神経を逆撫ですることはない。氏育ちのいい青年紳士Herbert Pocketを彼のスポークスマンにし、MagwitchがHerbertに告白したことをHerbertが要約してPipに語るという婉曲な表現方法がとられている。しかも、改心したMagwitchは象徴的に名前までProvisと変え、HerbertはMagwitchを知らずProvisしか知らない。

This acquitted young woman and Provis had a little child: a little child of whom Provis was exceedingly fond. On the evening of the very night when the object of her jealousy was strangled as I tell you, the young woman presented herself before Provis for one moment, and swore that she would destroy the child (which was in her possession), and he should never see it again; then she vanished. … There comes the darkest part of Provis's life. She [kept her oath]. (418)

MagwitchはMollyが相手の女性だけでなく娘をも殺害したと思ひ込み——実際はJaggersがこの娘を養女を探していたMiss Havishamに渡し、娘はEstellaとして生きており、Mollyも無罪釈放でJaggersの家政婦となっている——、絶望のあまり、悪徳紳士Compeysonの手下になり、逮捕されるとオーストラリアに島流しになる。その後Pipを一目見ようと帰国すると、法を破った咎で死刑を宣告される。殺人犯Mollyが法に保護され、Magwitchだけが過度に法に裁かれる

[Trabb's boy] would have been much affected by disappointment, if he had known that his intervention saved me from the limekiln. Not that [he] was of a malignant nature, but that he had too much spare vivacity, and that it was in his constitution to want variety and excitement at anybody's expense. (443)

名前さえ一度も出てこない仕立屋Trabbの使用人は‘Everyman’と考えられるが、彼の気晴らしの仕方を囚人や孤児を見世物扱いする一般人のそれに当てはめれば、彼らの動機の不可解さの謎が解けるであろう。動機らしい動機がなく、他人を犠牲にして気晴らしをする体質なのだ。また、この‘constitution’は場面が変われば「憲法」「社会構造」に読替え可能で、事態は一層救い難い。Miss Havishamのように、婚約者の裏切りに気付いた結婚式直前で時間を止め、自ら「白衣の女」—— Collinsの*The Woman in White*が評判になり、女性たちは白衣を好んで着用した——という「見世物」になり、自虐嗜好に耽る女性の出現も何ら不思議ではない。

*Great Expectations*をセンセーション小説として読むと、鍛冶屋の徒弟Pipに「大いなる遺産」を約束し、彼を紳士にしようとしたのが、Pipだけでなく親類知人皆がその人と信じ込んでいたMiss Havishamでなく、実は犯罪者植民地Botany Bayで身を粉にして働いた囚人Magwitchだったという有名な大筋の要が‘the law of England’すなわちある過去の裁判にあることがわかる。勿論、‘constitution’はここでも正義でなく商業主義に基づくため、真実より「万人の幸福」が優先する。以下、‘the law of England’がプロットの展開にどのような作用をするか、また、語り手兼主人公のPipがこの抱束からどのように逃れたのか考察したい。

2. 法廷のトリック

‘the law of England’に最も精通し自在に運用しているのは、Mr Jaggersである。“Do you know, or do you not know, that the law of England supposes every man to be innocent, until he is proved — proved — to be guilty?” “Take nothing on its looks; take everything on evidence. There's no better rule.” (351) これらはMr Jaggersの決まり文句で、彼が証拠不十分の裁判で自由自在に勝利を掌中にし（黒を白にする意味）、関係者でさえ用意に気付かない複雑な人間関係を「蜘蛛の巣」のようにはりめぐらすモットーでもある。つまり、彼は「気晴らし」や「見世物」を必要とする社会では「外見」が大きな影響力を持つことを熟知しており、そのうえで‘evidence’すなわち‘the strict line of fact’ (351)を主張する。故にテキストが提示する曖昧模糊としてとらえどころがない現実には、聞き手に余程の確信がない限り、彼の意向次第で黒にも白にも色付けられる。この事を端的に裏付け、本作品のプロット錯綜の元になる事例がMollyの裁判である。Mr Jaggersは嫉妬が高じて同棲相手（後にMagwitchと判明。二人は合法的結婚が何かもわからない程、下層社会の出身）の愛人を絞殺したMollyに証拠不十分の理由で無罪判決を勝ち取り、釈放後は自宅に家政婦として住まわせている。Mollyの裁判及び事件当時の状況は、*The Woman in White*における複数の人間による証言の手法をDickensが意識的に採ったのか、Mr Jaggersの法律事務所で長年忠実に働くWemmickとMagwitchの口からPipに語られる。

Wemmickはプロの立場から事件及び裁判の様子を簡潔明瞭に次のように語っている。

The murdered woman ... was found in a barn near Hounslow Heath. There had been a violent struggle, perhaps a fight. She was bruised and scutched and torn, and had been held by the

*Causes Celebres*の一部との酷似が指摘されるほどである。⁽⁴⁾センセーション小説が破竹の勢いで読者層を拡大し、売上を急激に伸ばした60年代、⁽⁵⁾Collinsはこのブームに乗り、代表作*No Name* (1862), *Armadale* (1866), *The Moonstone* (1868) を発表した。ところが、Dickensはセンセーション小説の「元祖」と呼ばれても不思議はないほど、彼の小説と犯罪小説・推理小説の要素とは終始切り離せないにもかかわらず、⁽⁶⁾*Great Expectations*を境に、それまで他を圧倒する人気を誇った彼の小説が市場を独占することはなくなり、彼自身の創意意欲も以前の勢いは無くなった。⁽⁷⁾「秘密」に焦点をしばれば、*Great Expectations*は確かにセンセーション小説に分類されるが、一方で一連の大衆受けしたセンセーション小説と一線を画しているのも確かなことである。⁽⁸⁾何故なら本作品はセンセーション・ブームを興味本位に他者（特に所謂社会的弱者）を慰めものにする道徳的墮落ととらえ、これを増長し商業ベースにのせる社会構造の欠陥そのものを憂えるDickensの文学姿勢を如実に表しているからだ。

Dickensの非難の声はプロットの展開、人物の性格づけに限らず、末端のエピソードに至るまで浸透しているが、第18章冒頭のシーンはセンセーション小説を憂さ晴らしに読み耽る読者——その多くは有閑階級の女性たちだった⁽⁹⁾——の滑稽なパロディである。一日の仕事を終えた田舎の素朴な労働者たちが近所の酒場に集い、殺人事件を扱った新聞記事を酒の肴に、談笑に暇をつぶしている。記事を読み上げるのは、おそらくその場でただ一人活字がまともに読めたためであろうが、教会の事務員で芝居好きのMr Wopsleである。彼が声色を使い、被害者、加害者、証人、開業医、検死官、教区吏員等事件関係者の記述箇所を演じると、皆事の真相究明など問題にならないと言わんばかりに、彼の演技に打ち興じている。

[It] was a Saturday night. There was a group assembled around the fire at the Three Jolly Bargemen, attentive to Mr Wopsle as he read the newspaper aloud. Of that group I was one.

A highly popular murder had been committed, and Mr Wopsle was imbrued in blood to the eyebrows. He gloated over every abhorrent adjective in the description, and identified himself with every witness at the Inquest. …He enjoyed himself thoroughly, and we all enjoyed ourselves, and were delightfully comfortable. In this cozy state of mind we came to the verdict Wilful Murder. (160)

この和気あいあいとした余興は、Mr Wopsleの独演が終わった直後、ロンドンで法律事務所を開く辣腕弁護士Mr Jaggarsが突然ここに現れ、Mr Wopsleにあたかも彼が証人の一人でもあるかのように喚問すると、‘Wilful Murder’の判決は撤回され、今度は皆Mr Wopsleの人格を疑い始めるという、後味の悪い終わり方をする。

また、*Great Expectations*で「気晴らし」の主要な対象として見落とすことができないのは、囚人と孤児である。Abel Magwitchを筆頭とする囚人たちは人々の食欲を旺盛にする“terrible good sauce” (64), 日頃の懸念を忘れさせる“an interesting Exhibition” (248) であり、彼らに死刑を宣告する裁判所は“a large theatrical audience” (466) で超満員となる。Magwitchは作品半ばで主人公Pipの真の遺産提供者と判明するのだが、孤児PipもまたMagwitch同様、‘by hand’で彼を育てる（というよりむしろ小突きまわすと言う方が適当なのだが）ことを誇示する姉Mrs Joeや彼の教育顧問を自他ともに吹聴するMr Pumblechookには格好の「見世物」である。

錯綜するプロットと法律： センセーション小説として読む *Great Expectations*

松村豊子

1. センセーション小説と *Great Expectations*

1860年代、イギリスで爆発的人気を博したセンセーション小説を ‘the novel-with-a-secret’ と定義したのは、ヴィクトリア朝小説の実証的研究分野を開拓したKathleen Tillotsonである。⁽¹⁾ このジャンルの代表作の一つに挙げられたDickensの*Great Expectations* (1860-61) では、主人公兼語り手Pipの秘密が他者の秘密に吸収されるため、テキストが頻繁に提示する数々の謎は解明不可能な程重層化している。*Oedipus the Rex*の筋立てに拠るところが大きい本作品の秘密のとらえ方及びプロットの展開のユニークさは、Wilkie Collinsの有名な推理小説*The Woman in White* (1859-60) の素人探偵による事件の謎解きのプロットと比較すれば明らかである。*The Woman in White*は*Great Expectations*同様Dickensが主幹を務める週間雑誌*All the Year Round*に連載され、しかも、前者は後者の連載開始数カ月前に空前の人気をさらい連載が終わったばかりだった。*The Woman in White*はCollinsに彼の文学上の ‘mentor’ であったDickensの庇護から独立する程の自信を与えた作品だが、素材である事件がセンセーションナルで、犯人究明の語り方も法廷の証人喚問を模倣した斬新なもので、大衆の関心を集めたのも当然と思われる。DickensはCollinsに宛てた手紙で、*The Woman in White*の成功を祝福し、Collinsの手法を称賛しつつ、事件の謎解きが登場人物の自然な人間関係に優先するプロットには納得がいかないと言明している。

The story is very interesting, and the writing of it admirable. ...I always contest your disposition to give an audience credit for nothing, which necessarily involves the forcing of points on their attention, and which I have always observed them to resent when they find it out – as they always will and do. ...Perhaps I express my meaning best when I say that the three people who write the narratives in these proofs have a DISSECTIVE property in common, which is essentially not theirs but yours; and that my own effort would be to strike more of what is got *that way* out of them by collision with one another, and by the working of the story.⁽²⁾

複数の人物によるそれぞれ独立した ‘narratives’ が表現する以上のものを、彼なら人の出会いと ‘story-telling’ で創造してみせると、Dickensは豪語さえしているわけだが、実際、*Great Expectations*のプロットは推理小説の一面的なプロットとは比較にならない程重層化し、複雑に錯綜し、テキストは推理小説人気を含めたセンセーション・ブームをパロディ化さえしている。

センセーション小説の題材の大半は、当時新聞雑誌を賑わした中産階級の醜聞事件や犯罪事件からとられたが、⁽³⁾Collinsの場合は特にこの傾向が著しく、*The Woman in White*の事件描写の細部と、彼がパリで収集した ‘French criminal records’ の一つMaurice Mejanの*Recueil des*